

序章
ほんとうに未来を変えるには

世の中のむずかしい問題を、どのように扱えばいいだろう。

よく使われる対照的な方法が二つある。「戦争」か「平和」か——つまり、攻撃的に争うか、おとなしく服従して穏便に収束を図るかだ。

どちらの方法もうまくいかない。前者は、銃や金や投票権を使って、他者が何を望んでいるかなどおかまいなしに、ほしいものを無理やり手に入れようとするが、必ず押さえつけられた側からの反動がある。後者は、だれにも何も押しつけないが、状況は何も変わらない。

この二つの極端なやり方が、あらゆるところで用いられている。一対一の対人関係では、押しが強いのか、事なかれ主義。仕事では、親分風を吹かせるか、「長い物には巻かれる」。コミュニケーションでは、自分の望む方向に話を誘導するか、責任を放棄する。国政では、自分の言い分を通すために取引するか、他者がそうするに任せる。国際関係では、問題が気候変動であれ、貿易ルールであれ、中東和平であれ、自分の解決策を相手かまわず押しつけようとするか、果てしない交渉をするかだ。

きわめてむずかしい社会問題に取り組もうとするときの、こうした極端な、広く蔓延しているやり方は、たいてい失敗し、私たちは行き詰まり、悩み苦しむことになる。もちろん、これは一般論であり例外もたくさんあるが、多くの場合はそうなる。

別の方法が必要だ。争いか服従かという、後ろ向きで何も生み出さないかたちを超えたやり方が必要なのだ。

ニューヨークで奮闘するアーティストやミュージシャンを描いた、ジョナサン・ラーソンのブロードウェイ・ミュージカル『レント』で、ある登場人物がこう叫ぶ。

「戦争の反対は平和ではない。創造だ！」^[1]

むずかしい社会問題に取り組むには、戦争でも平和でもない方法、集団コレクティブ・エンリエンションによる創造が必要だ。では、どうすれば新しい社会的現実を共創コクレエションできるだろうか。

人は二つの根本的な衝動をもっている

新しい社会的現実を共創するには、対立関係にある二つの根本的な衝動、力と愛について考えなければならぬ。

……と言っただけでは、何のことやらわからないだろう。なにしろ「力」や「愛」という言葉には、百人百様の定義がある。

本書で使うのは、あまりなじみのない定義だ。神学者であり哲学者であるパウル・ティリッヒの定義を踏まえて考えることにする。存在論的な定義だ。力や愛が何を可能にするか、何を

生み出すかよりも、力や愛とは何か、なぜ存在するのかに関わるものだ。これを採用する理由は、私の実体験にある。個人、集団、コミュニティ、社会、どのレベルであれ、厄介な問題に取り組むには実際に何が必要かを考えるとき、この定義は正しいと感じるのだ。

●力とは「生けるものすべてが、次第に激しく、次第に広く、自己を実現しようとする衝動」である。言い換えれば、力とは、自分の目的を達成しようとする衝動、仕事をやり遂げようとする衝動、成長しようとする衝動である。

●愛とは「切り離されているものを統一しようとする衝動」である。言い換えれば、愛とは、ばらばらになってしまったもの、あるいはそう見えるものを再び結びつけ、完全なものにしようとする衝動ということになる。

本書の中心にあるのは、こうした愛と力のとらえ方であり、一般に考えられているような、身体的な力とロマンチックな愛のことではない。



Love



Power

なぜ、問題は「複雑」になるのか

自己実現しようとする衝動だけ、統一しようとする衝動だけでは、むずかしい問題に対処することはできない。両方が必要だ。

私たちは、何か新しいものを創造するには、それがビジネス、政治、テクノロジー、アート、何であれ、はっきりした目的意識や力がなければならぬと考えがちだ。

なぜそう考えるのだろうか。それは、創造を取り巻く背景が、空っぽの世界、つまりだれのものでもない未開の領域、空白のキャンバスだと想定しているからだ。たいていの場合、この前提は正しくない。

歴史を例に挙げよう。一七八八年、イギリス人入植者がオーストラリアに到着し、四万年先に到着していた先住民に遭遇した。この史実は、新しい社会的現実の創造のために自ら地球を横断した人々の勇気と冒険心の典型例である一方、このパイオニア精神というものが人間と生態系にもたらす破壊の典型例でもある。二世紀以上のあいだ、オーストラリアの入植者と先住民の衝突は、「テラ・ヌリウス」主義という表現の枠にはめられていた。テラ・ヌリウスはローマ法の用語で、「だれのものでもない土地」「空き地」という意味だ。一九九二年になってやっと、オーストラリア最高裁判所は、オーストラリア大陸は実際に「テラ・ヌリウス」だっ

たことはかつて一度もない、現代の入植者は先住民と共存する新しい道を見つけなければならぬと裁定した。

「テラ・ヌリウス」に住んでいる人は一人もいない。世界が空き地だというふりをすることはできても、事実はそうではない。地球は、人や建物や車やゴミの山でどんどんいっぱいになっている。大気には限界まで二酸化炭素が増えている。社会には多種多様の強硬な対立する意見や考え方や文化があふれかえっている。この「飽和状態」こそが、困難きわまりない社会問題に取り組むには力だけでなく愛も必要だとする根本的な理由なのだ。

問題の解決がむずかしくなるのは、次の三つの複雑性がある場合だ。³

●ダイナミックな複雑性……原因と結果が相互依存の関係にありながら、時間的にも空間的にも遠く離れている。このような問題は個別に対処していたのではうまくいかない。システムを全体として見ることが不可欠になる。

●社会的な複雑性……関係者のものの見方や利害が一致していない。このような問題は専門家が対処してもうまくいかない。当事者たち自身の参加が不可欠になる。

●生成的な複雑性……未来がまったく予測不可能で未知のものになる。このような問題は

過去のベスト・プラクティス（模範事例）を当てはめてもうまくいかない。新しい「ネクスト・プラクティス」となる解決策を育てることが不可欠になる。

世界の飽和状態が、この三重の複雑性を生み出している。

人はそれぞれ独立した存在であり、自分の行為が他人に影響を及ぼすことはない（他人の行為が自分に影響を及ぼすこともない）、と考えるのはまちがいだ。人はだれでも同じものの見方をするとか、違いがあっても市場競争や政治上・法律上の取り組みで解決できると考えるのも、まちがっている。つねに従来のやり方が通用する、あるいは正しい答えが見つけられると考えるのも——そういうふりはできても——まちがいだ。

世界の飽和状態に目をつぶって世界を空っぽだと見なしたり、問題の複雑性に目をつぶって問題を単純だと思いついたら、私たちは行き詰まってしまう。

行き詰まりたくないなら、人間の相互依存性を認め、協力し、進むべき正しい道を感じる必要がある。力だけでなく愛も発揮することが必要だ。

これは簡単に聞こえるかもしれないが、簡単ではない。困難で、危険なことである。



われわれは何をすべきか？

「愛のない力」と「力のない愛」

力と愛は扱うのがむずかしい。それぞれ二面性があるからだ。

力には、ものごとを生み出し、前進させる生成的な面と、ものごとを衰退させる退行的な面がある。そして、力ほどはつきりわからないが、愛にも生成的な面と退行的な面がある。

フェミニスト学者のパオラ・メルキオリは、歴史的につくられた男女の役割を見れば、この力と愛の二面性がわかると私に指摘した。男性的な力を実体化した存在——父親は、外に働きに行き、自分の仕事をする。父親の力の生成的な面は、世の中で何か価値あるものを創造する可能性があることだ。一方、退行的な面は、自分の仕事にかまけて、同僚や家族とのつながりをないがしろにし、ロボットか暴君になる恐れがあることだ。

これとは対照的に、女性的な愛を実体化した存在——母親は、家において子供を育てる。母親の愛の生成的な面は、文字どおりの意味で子供に命を与え、比喩的な意味でも家族全体に命を与えることだ。一方、退行的な面は、子供や家族とあまりにも一体化してしまい、家族の、そして特に自分自身の自己実現の必要性を否定し、家族や自分自身の成長を妨げる恐れがあることだ。

愛は、力を退行的ではなく生成的なものにする。

力は、愛を退行的ではなく生成的なものにする。

したがって、力と愛はまさに補完的な関係にある。それぞれが持てる可能性をすべて発揮するには、相手が必要なのだ。力だけを重視した「テラ・ヌリウス」の世界観がまちがっているのと同様に、「愛こそはすべて」の世界観もまちがっている。

パウル・ティリツヒと親交のあった心理学者のロロ・メイは、力（彼は「意志」と呼んだ）と愛を分断することの危険性を警告している。

「愛と意志は、相互依存関係にあり不可分だ。どちらも、存在と存在を結びつけるプロセス——相手に影響を及ぼそうと手を伸ばし、相手に対する意識を形成し、創造する——である。

しかしこれは、相手に影響を及ぼすと同時に相手の影響に対して自分も心を開いた場合に、内的感覚においてのみ可能である。愛なき意志は小手先のものになり、意志なき愛は感傷的なものになる。そうなると、結びつきの感情とプロセスの基盤が崩れ去ってしまう」

メイの言う結びつきのプロセスは、社会的なレベルでも作用する。力と愛の両方を引き込むことさえできれば、それは非暴力の社会変革を成し遂げることができる。

非暴力の社会変革を実践したマーティン・ルーサー・キング・ジュニアは、優れた活動家であるとともに、精神的な指導者でもあった。彼は、困難な社会問題に取り組むうえで、争いから服従かという二者択一を越えた方法があることを示し、その結果、アメリカで、そして世界中で新しい社会的現実が生まれることに貢献した。南部キリスト教指導者会議（SCLC）での

最後となった議長演説で、キング牧師は、大学の博士課程で研究したテイリツヒの著作から引用しながら、力と愛の本質的な相補性を強調した。^{〔6〕}

「愛なき力は無謀で乱用を招き、力なき愛は感傷的で実行力に乏しいものです」^{〔7〕}

私自身の過去二〇年間の経験もキング牧師の分析を完全に裏づけている。

愛なき力は実際、無謀であり乱用されやすい。社会変革に関わる人間が、自分と他者が相互依存関係にあるという認識を欠いて自己実現のために行動すれば、その結果は思いやりのないものになり、最悪の場合、圧制的なもの、あるいは大量虐殺のような惨事にもなりかねない。

逆に、力なき愛は実際、感傷的で実行力に乏しい。人間の相互依存性を認識し、社会集団を統一しようとするのはいいが、自分自身や他者の成長を妨げるような方法でそうすれば、何の変化も生まないだけでなく、最悪の場合、かえって現状を強化することにもなりかねない。

愛なき力は、私たちが大切にしているものを何もかも破壊する焦土戦という結果をもたらす。力なき愛は、私たちを立ち往生させる活気のない平和という結果をもたらす。どちらもひどい結末だ。もっとよい道を探さなければならぬ。

演説の中で、キング牧師はこう言葉を続けている。

「現代の深刻な危機を生み出しているのは、まさにこの道德なき力と力なき道德の衝突なのです」^{〔8〕}

この衝突が続いているのは、私たちが力か愛かという対立を続けているからだ。社会やコ

ミュニティや組織では、そして私たち一人ひとりの内部にも、利害と差異に着目する「力陣営」と、つながりと共通性に着目する「愛陣営」の二派がつねにある。両陣営の衝突——ビジネス、政治、社会変革など、どの世界にもある——が、きわめて困難な社会問題を解決する私たちの能力を阻んでいる。

新しい現実を共創するために

力と愛は垂直に立つ柱のようなものであり、社会変革の空間を線引きしている。行き詰まりから脱け出し、この空間を動き回りたいのなら——むずかしい社会問題に取り組みたいのなら——私たちはこの二つの衝動を理解し、どちらも發揮しながら仕事をしなければならぬ。

こちらか、あちらかという選択ではなく、力と愛は継続的に創造的に両立させなければならぬ永遠のジレンマだ。

二つの両立は、言うのは簡単だが実際にするのはむずかしい。カール・ユングは、一人の人間の中でさえ、この二つの衝動が共存することは不可能ではないかと疑っている。

「愛が支配的であれば、権力への意志がない。意志の力が最重要であれば、愛が欠けている。他方はもう一方の影にすぎない」^{〔9〕}

ユングの弟子のロバート・ジョンソンはこう言う。

「おそらく、両立させるのが厄介な対極の組み合わせの最たるものは、愛と力である。現代社会は、この二極対立によって断片化されており、両者を両立させようとする試みは成功するよりも失敗するほうが圧倒的に多い¹⁰」

私は、愛のない無謀で乱用される力の実例をたくさん見てきた。力のない感傷的で実行力に乏しい愛の実例もたくさん見てきた。愛のある力の実例はほとんど見たことがないくらいだ。力と愛を両立させる能力のある人はあまりにも少ない。もっと多くの人がそれを学ぶ必要がある。

新しい社会的現実の共創に成功したいのなら、力か愛かの選択をしている場合ではない。両方を選ばなければならない。

では、どうすればそれが可能なのか。本書の目的はこの問いに答えることだ。